

# 第 14 回(2021 年度)JACET 関東支部大会

●○○ 大会テーマ ●○○

## DX 時代における大学英語教育 —ハイブリッド・ハイフレックス・対面型学習—

### English Language Education in Universities during the New Era of Digital Transformation: Hybrid, HyFlex, and Face-to-face Learning

日 程 / 2021 年 7 月 11 日

July 11th, 2021

Z o o m 開 設 / 9 時 00 分 以 上

Access starts at 9:00 a.m.

参 加 費 / JACET 会 員 は 無 料  
非 会 員 は 2,000 円

Admission FREE for JACET  
member; 2,000 yen for non-member

事 前 申 込 URL  
/

URL for Registration /

<https://forms.gle/RTBBPwcl2tcXrV3h8>

E-mail: takane46@gmail.com (大会運営委員長 山口高領)  
大会に関するお問い合わせはこちらへ。

## Call for Papers

### JACET-KANTO Journal Vol. 9 (JACET 関東支部紀要 第 9 号)

■原稿締切日：2021 年 8 月 31 日 (火) 23:59 JST

■原稿分量：A4 判横書き、英文 abstract、keywords、図、文献などを含めて計 20 枚以内 (日・英とも)

■応募手順：

1. 支部ホームページ上の「JACET-KANTO Journal Vol. 9 Call for papers」をご確認ください (Refer to: <http://www.jacet-kanto.org/>)。

2. 「申し込みフォームへ」

<https://jacet-kanto.org/journal/submission/index.html>

をクリックし、応募手続きを始めてください。

3. “JACET-KANTO Journal Online Submission Form” の必要事項を入力してください。

4. Form 上の “Attachment” にて、所定テンプレートによる応募原稿 (データファイル) を「オンライン提出」してください。

5. Form 上の “Submit” をクリックし、応募手続きを完了してください。

■紀要発行日：2022 年 3 月 31 日 (木) (予定)

Vol. 9 から、J-STAGE に全文 XML 掲載にすることで、掲載原稿が検索されやすく、引用されやすくなります。

関東支部大会での発表に基づいた原稿も大歓迎です。皆様からのご投稿をお待ちしております。

大学英語教育学会（JACET）関東支部会員各位

大学英語教育学会会長  
小田 眞幸（玉川大学）

### ご挨拶

日頃の学会活動にご参加いただきましてありがとうございます。

この度は第14回（2021年度）JACET 関東支部大会が2021年7月11日（日）に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。ちょうど昨年のごころ、私たちは新型コロナウイルスの感染拡大により、研究、教育の両面で大きな変化を求められました。JACETをはじめとする学会活動についてもゴールが定まらない中それぞれは試行錯誤を繰り返しながら、「出来ることは何か」を考えて困難な状況の中、ステップを踏みながら乗り越えて今日に至っていると思います。昨年は第59回の国際大会を中止するという苦渋の選択を強いられましたが、関東支部におかれましては8月の第13回支部大会を完全にオンラインで開催するという画期的な試みをされた結果、これまでは支部会員が中心であった参加者が全国、あるいは海外まで広がるという新たなスタイルを作られたことは、その後の他の支部のモデル、更にJACET全体のモデルとなっていることは言うまでもありません。

今年度は「DX時代における大学英語教育 ―ハイブリッド・ハイフレックス・対面型学習―」という過去1年間の関東支部の活動を象徴する、タイムリーなテーマで支部大会が開催されます。新型コロナウイルスの今後の感染状況またどれにともなう教育現場の対応についてはまだしばらく不透明な状況が続くとは思いますが、本年度の支部大会を通して学会として大学英語教育にさらなる貢献ができればと思います。関東支部大会のご成功をお祈りいたします。

本大会にご参加のみなさま

大学英語教育学会関東支部支部長  
第 14 回 JACET 関東支部大会委員長  
山口 高領 (秀明大学)

### 第 14 回 (2021 年度) JACET 関東支部大会開催に寄せて

昨年度に続き、Zoom を使ったオンラインでの開催でございます。本大会では、基調講演につきましては講演者のご体調回復に専念していただくために休止となりましたが、賛助会員によるライトニングトーク (LT)、研究発表・実践報告・ワークショップ・シンポジウムの他、昨年度開始した SIG 紹介・発表もでございます。また JACET 関東支部会員のみなさまのための支部総会はお昼休み後に、意見交換会はプログラムの最後に行います。

今回も Zoom URL は 1 つをお知らせしましたが、前回とは異なり、Zoom に入った場所を Main Room とし、ご希望に応じて、Room 1 と Room 2 に入るという体制にしました。LT や支部総会 Main Room で行いますが、ご興味に応じて Room 1 と Room 2 にて参加内容を選べます。なお、発表内でブレイクアウト機能を使う発表の場合には専用の Zoom URL を発表直前に Main Room のチャット欄にてお知らせします。また、万が一発表が行えない場合に備え、予備の時間帯も昼休みなどに設けました。

今回のこの大会運営に当たりまして、多くの先生方にご協力いただきました。副支部長の Paul McBride 先生 (玉川大学)、会員のみなさまへの連絡のお手伝いをしてくださった、事務局幹事の長田恵理先生 (國學院大學)、新井巧磨先生 (早稲田大学)、中山夏恵先生 (文教大学)、広報担当の鈴木健太郎先生 (北海道教育大学)、賛助会員のみなさまとの連絡にご協力いただいた荊紅涛先生 (関東学院大学)、また、お忙しい中、Host や Co-host の役割も積極的に引き受けていただきました運営委員の先生方、今回の LT にご協力をいただきました賛助会員の桐原書店さま、mpi 松香フォニックスさま、Lexxica さまにも、改めましてお礼申し上げます。

どうぞ今後とも、JACET および関東支部の益々の発展に向けてご尽力いただけますよう、よろしく願い申し上げます。

## ●○● 各発表要旨 ●○●

自己エスノグラフィーによる教師の省察—語用論・文法・CLT 統合型指導に向けて— シーハン 小田 早苗（お茶の水女子大学） .....	1
<b>DX 時代に問う異文化適応目的の ESL 教授法の有効性</b> 大味 潤（東京経済大学・非常勤講師） .....	3
<b>教育問題研究会の活動とその成果：過去・現在・未来</b> 清田 洋一（明星大学） 大崎 さつき（創価大学） 山口 高領（秀明大学） 栗原 文子（中央大学） .....	5
<b>コロナ禍における学習者と教師の自律的成長</b> 林 千賀（成蹊大学） 小嶋 英夫（文教大学） 片桐 早苗（弘前大学） .....	7
<b>ライティング支援によるピアディスカッションの効果</b> 木村 美由紀（東京慈恵会医科大学・非常勤講師） .....	9
<b>オンライン授業における場づくりとアプローチ</b> —英語学習のためのマインドセットに焦点をあてて— 関戸 冬彦（白鷗大学） .....	11
<b>Transformative Learning Theory in the University EFL Online Classroom</b> Andrew Enomoto (Bunkyo University) .....	13
<b>Comparison of First-year Students' L2 Motivation at Four Universities</b> Tetsuya Fukuda (International Christian University) .....	14
<b>Foreign Language or Lingua Franca: Examination of the Application of Research Outcomes to Language Education Through Pragmatics</b> Lala Takeda (Showa Women's University), Megumi Okugiri (University of the Sacred Heart), Naoko Osuka (Meiji University), Pino Cutrone (Nagasaki University), Keisuke Imamura (Tokyo University of Marine Science and Technology), Misa Fujio (Toyo University), Ivan Brown (Joetsu University of Education), Ayaka Takeuchi (Ibaraki Prefectural Shimodate First High School), & John Campbell-Larsen (Kyoto Women's University) .....	16
<b>小学校英語指導者の育成に J-POSTL エレメンタリーはどのような効果をもたらすのか</b> 米田 佐紀子（玉川大学） 栗原 文子（中央大学） 山口 高領（秀明大学） 長田 恵理（國學院大學） .....	18

自己エスノグラフィーによる教師の省察  
—語用論・文法・CLT 統合型指導に向けて—

**An Invitation to Autoethnographic Research**

シーハン小田 早苗 (お茶の水女子大学)

近年、質的研究方法として教育領域においても注目されつつある自己エスノグラフィー (autoethnography) は、研究者が自身の経験を対象化し再帰的に振り返ることにより、当事者の視点を通して複雑な事象を解明するアプローチである (Adams, Jones, & Ellis, 2015)。自己 (研究者) と他者 (読み手) との相互行為およびその社会文化的背景の理解を目的とする自己エスノグラフィーにおいては、研究者の自己省察から知見を得るだけでなく、語られる事象を他者が自らの経験と照らし合わせながら省察することにより、応用的可能性が検討できる (Chang, 2008)。また、個人の経験を語るというスタイルを通し、学術的に複雑な事象がより広範な読み手に伝わりやすくなり、学術研究と社会をつなぎ *academia* と *life* の接点を生み出すという可能性を持つ。

研究者が自己の記憶に頼る自己エスノグラフィーは主観的で信頼性に欠けナルシスティックであるとの批判もあるが、その批判に応える形で発展した分析的自己エスノグラフィー (analytic autoethnography) (Anderson, 2006) のアプローチを採用することにより、近年 TESOL 分野でも自己エスノグラフィーによる研究が進んでいる (Canagarajah, 2012)。主観性を認めつつ社会科学側面を強調することにより、自らの経験に基づいた深い分析・解釈とともに信頼性の担保が可能となる。本研究においても、この分析的自己エスノグラフィーの立場から対話によるデータを質的に分析しつつ、個人的な経験を深く掘り下げた解釈により他者に同様の気づきをもたらすことをねらいとした。

具体的には、そのような自己エスノグラフィーの手法を用いつつ、日本の TESOL 教育現場で発表者がこれまで経験した分断 (gap) に関し、その原因と解決の可能性を解明することを試みる。そのような gap の 1 つとして、コミュニケーションを水面下で支える語用論的意識をめぐる学習指導の欠如に注目した。語用論とは、話し手と聞き手がさまざまな状況において相互交渉を通しいかに意味を生み出していくかを探究する重要領域であるが、他の言語領域と複雑に絡み合い明確な定義づけ

## THE 14th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

が困難であるため、英語教育現場での取り組みはいまだ乏しい(石原, 2015)。しかし実際には大学入試や英検、TOEIC 等の英語試験においてすでにかかなりの数の語用論的問題が出題されている。そこで、多くの教師がコミュニケーション重視型指導(CLT)の重要性を感じながらも試験対策・文法指導との両立に苦慮している現状をふまえ、語用論・文法指導・CLTをつなげ教師の認知と実践を橋渡しする統合型指導の確立が急務であると考え、その可能性を探究した。

調査方法としては、対話型自己エスノグラフィーにより発表者と共通の実践コミュニティ(Community of Practice: CoP)に属する調査協力者12名に半構造化インタビューを実施し、その対話に反映される発表者自身の認知と実践の分析を通し、統合型指導実現のための要因を調査した。その結果、学校教育と社会、大学教育と高校教育(受験英語学習)を結ぶ continuum の重要性が明らかになり、その体現化のためには教師が多面的な視点を持つことが必要であると判明した。また、そのような多面的視点を得るためには、教師が学習者、研究者、親、ビジネスパーソン等のさまざまなアイデンティティを有しそのアイデンティティの存在を自ら意識することが重要であると確認された。さらにその過程において、CoP から得られるサポートが大きな役割を果たすということが明らかになった。

自己エスノグラフィーは、同様の問題と対峙している他者に有益な知見を与えるだけでなく、他者自身の省察を促すことで、提示された問題に関するオープンな対話の場を提供する側面も備え持つ。分析方法の改善等課題は満載であるが、統合型指導実現に向け、教師・研究者の皆様との対話により本研究をさらに発展させていきたい。

### 参考文献

- Adams, T. E., Jones, S. H., & Ellis, C. (2015). *Autoethnography*. New York: Oxford University Press.
- Anderson, L. (2006). Analytic autoethnography. *Journal of Contemporary Ethnography*, 35(4), 373-395.
- Canagarajah, A. S. (2012). Teacher development in a global profession: An autoethnography. *TESOL Quarterly*, 46(2), 258-279.
- Chang, H. (2008). *Autoethnography as method*. Walnut Creek, CA: Left Coast Press.
- 石原紀子編著・アンドリュー・D・コーエン著 (2015)『多文化理解の語学教育: 語用論的指導への招待』研究社

## DX時代に問う異文化適応目的のESL教授法の有効性 Teaching ESL for Face to Face Intercultural Communication in the Era of Digital Transformation

大味 潤 (東京経済大学・非常勤講師)

### 1. はじめに

国際語としての英語を推奨する潮流に加え、ネット上のコミュニケーションが全てと錯覚する昨今でも、ネットに映るのはあくまで実体ある話者の投影に過ぎない。英語という共通言語を使ってコミュニケーションを取る際でも、話者個人は各言語文化の影響を強く持ち、コミュニケーション上の常識は必ず異なる。それが日米のように好対照をなす東西文化に属する場合、異文化摩擦は日常となって当然である。英語文化たる欧米文化に無知でその常識を持たない為、そして言語に対し古文や漢文の様な学習方法を想定しがちな日本人に対し、文字中心の言語情報だけでなく非言語情報をも合わせて教授することで、第2言語として新しい角度から言語やコミュニケーションを習得するのが必要だと考え、異文化適応を組み込んだ英語教授法を学生の視点や意見を元に作り上げて来た。

### 2. オンライン授業

今回のコロナ禍でオンライン授業を余儀無くされたが、対面に比べコミュニケーションで遣り取りする情報量が圧倒的に少ないZOOM条件下、このような異文化適応を目的とした教授法がどこまで有効なのか、同時に対面とオンライン授業で共通する問題点と異なる問題点は何かを問い直すこととなった。今回はそんな状況で行った、文化を持つ「人」を中心とした教育に拘った実践報告である。

### 3. 日本人学習者の問題と対策

今回取り組んだ日本人の英語学習者の問題点とその対処法は以下の5つである。i) 日本人はそもそも知らない人と話さないし話せないが、これに対し最初のアクティビティは全て3人組で始め、その後4人グループ、2人ペアワークと移行しこの問題を解消した。ii) 発音や文法の正確さに不安を感じる問題に対しては、相手の呼び掛けに対し自動的に言葉を打ち返す練習や、自分のメッセージを如何に伝えるかを主眼にしてその意識を変えさせた。iii) 心理的に英語を遠く感じる問題に対しては、学生が日常日本語で行う挨拶内容や、街角やバイト先で見知らぬ外国人と話す状況を想定し、必要となる英会話をオリジナル教材で作り出し心理的距離を縮めた。iv) 教科書偏重でページ数の消化や解答の丸暗記に終始する問題に対しては、英語を使ったコミュニケーション技能の向上にその学習目標を移

## THE 14th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

すことで解決を図った。v) クラスメートの視線が気になり発話が出来ない心理的問題に対しては、互いに知り合い分かり合うアクティビティを英語練習前に十分に繰り返し、初対面の相手とも心地良く教室行動を行わせることで解決している。

### 4. 日米異文化差

取り扱う英語圏の異文化要素としては、1) 基本動作の「視線」「握手」等、2) 聞こえ方の違いにある「声量」「間の埋め方」等、3) 見え方の違いである「手の使い方」「顔の表情」等、4) 会話の運び方の違いとなる「感情表現」「ユーモア」等、5) 認知的な違いの「時間感覚」「個と集団」等全20項目を取り上げた。

### 5. 対象クラス

対象は2020年度の大学1年生の必修2クラスで、週2回を14週。レベルは共に全クラスで中位に当たる。履修人数は17人と18人で、ZOOMでのオンライン授業のみの為、教室での顔合わせは1度も無い。

### 6. 実践内容

授業は主に先述の英語圏の文化規範についての異文化理解の講義と、それに基づいたペアワークでの日常会話練習（規定会話と自由会話）で構成した。またその応用としてスピーチ（自己紹介と社会問題に対する意見表明）と、即応力養成の為の様々なタスクチャレンジ課題にも取り組ませた。タスクチャレンジは街角やバイト先を想定した「駅でのトラブル対処」「店舗での客対応」「イベント会場での案内」や、単語の知識に頼らずに事実や概念を伝える「4字熟語」「連想ゲーム」「出来事描写」等を行わせている。

### 7. 結論

年度末に行った質量双方のアンケート結果は、例年の対面授業と比較してもほぼ同一で概ね好評であった。クラスとしての一体感形成は十分に行えなかったが、受講クラス中唯一の「顔出し」のクラスらしく、画面越しにも友人作りは行えていたようである。しかし対面に比べ、コミュニケーションで受け取る情報が圧倒的に不足しており、また声色が伝わりにくく姿勢が固定される為に全体的に動きに大きく制約が掛かった。特に学生が受講する場所の制約上で声量が制限されたり、常に座っている為に上下半身の姿勢矯正の練習はほとんど不可能であった。またZOOM機能の為にアクティビティ間のタイムロスが多く（全体画面からブレイクアウトセッション間の切り替えやグループワークへの振り分けの手動作業等の為）、またWi-FiやZOOMそのものへの接続不良等も頻繁に起こる為、対面のクラスと比較して時間が大幅に無駄になった。何より例年の対面クラスとの直接の比較が出来ない為、総合的検証は不可能に近いが、これには両方を体験した学生に評価してもらおうしか無く今後の課題としたい。

## 教育問題研究会の活動とその成果：過去・現在・未来

### Accomplishments and Future Perspectives

清田 洋一（明星大学）

大崎 さつき（創価大学）

山口 高領（秀明大学）

栗原 文子（中央大学）

1991年の発足以来、JACET 教育問題研究会は、特に教員養成と現職教員の自立的な研修の観点から、日本の英語教育に関係する研究に取り組んできた。このシンポジウムでは、過去 10 年の活動について主に振り返りながら、現在の活動を報告し、今後の活動を展望する。

本研究会の発足当初からの研究テーマは、英語教員養成・研修である。その最初の協同研究の成果は英語科教育法のテキスト『英語科教育の基礎と実践』（三修社、1998）である。その後、2001年と2005年に部分改訂、2012年と2017年にそれぞれ全面改訂を行った。2017年に発刊され、現在使用されているのは、『行動志向の英語科教育の基礎と実践—教師は成長する—』（三修社）である。このテキストは、研究会が2014年に開発した『言語教師のポートフォリオ』（J-POSTL）に準拠したものである。J-POSTL は、中高での英語教員を目指す教職課程履修大学生と、中高の現職英語教員の授業力の向上に資することを期待して開発されたツールであり、その源泉は、CEFR、EPOSTL にある。2019年度末までに8000部が印刷され、全国の教職課程での教員養成や、教育委員会での教員研修にて活用されている。

2016年度からは、J-POSTL の小学校英語指導者版である『小学校英語指導者のポートフォリオ』（J-POSTL エレメンタリー）の開発を開始し、5段階の調査を経て、2020年3月に【暫定版】を発行し、さらに、2021年3月に【完成版】を発行することになっている。2020年度から新しい小学校学習指導要領が全面実施され、小学校での英語指導者の養成や研修のためのツールとしてすでに利用されはじめている。

また、J-POSTL を教育現場にさらに普及させるために、2017年度からその活用実践事例集の作成を計画・実行し、『「教師の自己評価」で英語授業は変わる—J-POSTL を活用した授業実践』（大修館書店）を2020年3月に出版する運びとなった。

## THE 14th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

一方、本研究会が主催する最大のイベントは「言語教育エキスポ」である。研究会の成果を報告するとともに、言語教育に関連するさまざまなテーマについて協同的に議論する場として、毎年1回3月に開催している。このイベントの母体は、2010年8月に開催した英独仏を中心とした「外国語教育合同研究会」である。この会議には J-POSTL の源泉である EPOSTL の編者代表である David Newby 氏を招いた。第2回目は EPOSTL の編者の一人 Barry Jones 氏を招聘して2011年3月に企画したが、東日本大震災で中止し、2012年3月に開催することとなった。「言語教育エキスポ」という名称にしたのは2013年である。以降表1の通り現在に至るが、2020年度は新型コロナウイルスのため延期し、10月25日(日)に言語教育エキスポ補講としてオンラインで開催した。

表1. 言語教育エキスポの基調講演・シンポジウム

年	基調講演・シンポジウム発表タイトル
2013	生徒が英語力を向上させる時の気づきに資する CAN-DO リストの開発、利用について
2014	Motivating learners through intercultural communicative language teaching (基調講演)
2015	English language education in Austria: teacher education in the context of the CEFR (基調講演)
2016	成長し続ける外国語教師に求められる教師像スタンダード (基調講演)
2017	Issues in in CLIL teacher education (基調講演)
2018	Three approaches to curriculum in English language teaching (基調講演)
2019	AI と翻訳機が進化した時代の外国語教育を考える (シンポジウム)
2020	テーマ「ここに新しい外国語の教育の芽がある。」

以上の他、本研究会の過去の成果報告書は、2005年から日本語版、2008年からは英語版をそれぞれ年1回発行し、現在は会誌『言語教師教育』に研究成果報告がなされている。これらはすべて研究会ウェブページに掲載されている。会誌『言語教師教育』は、2014年から紙媒体とウェブ媒体とで発行している。No.1として日本語版、No.2として英語版を各年1回で発行している。掲載種別には、論文・研究ノート・実践報告・書評・その他がある。

教育問題研究会は、学校の現場における実践と関連する理論研究をつなげることを意識して研究を行ってきた。研究会の未来への展望として、従来の英語教育の枠に捕らわれないより広いテーマで日本の英語教育の改善に寄与していきたいと考えている。

## コロナ禍における学習者と教師の自律的成長

### Learner and Teacher Autonomy under the COVID-19 Pandemic

林 千賀 (成蹊大学)

小嶋 英夫 (文教大学)

片桐 早苗 (弘前大学)

自律学習研究会による本シンポジウムでは、コロナ禍における英語学習者と英語教師の成長に焦点をあてる。未曾有の新型コロナウイルスの影響により学修環境が一変し、オンライン、オンデマンド、ハイブリッド型など遠隔授業の導入によって教育のニューノーマル(新常态)が形作られている一方で、教育の神髄は変わらず、主体的・自律的に学び続ける英語学習者および英語教師のあり方が常に問われている。そこでコロナ禍における学習者と教師の自律的成長に関する3つの事例を提示し、学習者と教師の自律を育む英語授業および教師教育のあり方について多角的に考察する。

事例1(片桐)は、授業形態の変化が学生の自律に与える影響に関する実践である。2020年4月、新型コロナウイルスの爆発的流行により、多くの大学が対面授業からオンライン授業への移行を余儀なくされた。首都圏から遠く離れた勤務校においても同様であった。1か月間という短い時間に対面を想定していた授業を大幅に変更し、オンライン授業へ移行する際には、これまでの実践で重要と考えていたグループ活動など協同を念頭に置いた運営の多くをあきらめたように思う。しかしながら、教師間の協同もあり新しいオンライン授業に対して技術的に順応するにつれ、実践者の根底にある「学生の自律した学習姿勢を育成すること」を次第に実践に反映した授業にシフトできた。このように実践者としては授業形態に影響され、“ブレ”が生じたように感じた学期であったが、授業終了時に行ったアンケートによると、学習者の自律に対する意識が高いことがうかがえる。この特殊な期間だったからこそその結果である可能性は否定できないが、学習者が一度も教員、仲間と対面することなく過ごしたいいわば特殊な2020年度前期の様子を、前年度と比較しながら検討する。

事例2(林)は、自律した英語学習者の育成を目的とした大学の英語選択科目(科目名:「自分でデザインする英語学習」)に関する報告である。当該科目は2020年度に発表者が勤務する大学の新設科目として開講され、Holec(1981, p. 3)の提唱

## THE 14th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

するオートノミーの定義 – 「自分の学習に責任を持つ能力 (“the ability to take charge of one’s own learning”）」 – に基づいて設計された。具体的には、それぞれの学生が自らの英語学習の目標（短期、中期、長期）を設定、学習計画を立案、さまざまな学習方法を実践しその学習効果を理解しながら、自分の学習スタイルに適した学習方法を探究・選択する。さらに学習過程のモニタリングおよび自己評価を通して学習計画の見直しや修正を行うことで、学生の主体的かつ協働的な取り組みを促した。今回の発表では当該科目の授業内容を概観した上で、半期にわたる学生の省察内容の分析を通して、コロナ禍で迎えた初年度の取り組みの問題点や今後に向けた改善点について明らかにする。

最後の事例3（小嶋）では、海外研修における英語教員志望生の変容的学習について報告する。OECD Education 2030 プロジェクトは、社会を変革し未来を作り上げていくためのコンピタンスを、「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマを克服する力」「責任ある行動をとる力」として特定した。2020年の春に、英語教員志望生を対象とするウオーリック大学 CAL 短期研修の引率者とし参加者を支援したが、日本人学生たちが英国の地で上記のコンピタンスに類する能力を育む姿を観察できたように感じる。新型コロナウイルスの影響下でどうにかプログラムを終えた本研修では、授業・ホームステイ・寮生活・学校訪問・文化訪問・学生間交流などに関する参加者の自己内省から、これまで抱いていた価値観・世界観を変容させる傾向が認められた。海外研修を取り入れた教員養成教育については、教員志望生たちの自律的・専門的成長を促す変容的学習の視点から、今後とも継続的に探究する必要があると考える。

異なるコンテキストでの実践研究をもとに、特殊な学修環境下での学習者と教師の自律を育む英語授業、教師教育のあり方について、参加者とともに協働的・省察的に理解・深化を図る。

### 引用文献

Holec, H. (1981). *Autonomy and Foreign Language Learning*. Oxford: Pergamon Press.

## ライティング支援によるピアディスカッションの効果

### The Effect of Writing-assisted Peer Discussion

木村 美由紀 (東京慈恵会医科大学・非常勤講師)

【はじめに】今回のリサーチでは、peer discussion の上達をターゲットにし、2020年の前期、後期と2段階のステップを設定しながら、A大学の3クラスでオリジナルな手段を使いながら実行した。Peer discussion のやり方は以下のようなのだ。まず、前期にベースを学習し、後期では、深く writing を伴う discussion の内容を学習して行く。前期では、①トピックを与える、②3人から4人のブレイクアウトにした。③peer の中で話し合いをするが、内容としては、他者の意見を聞いたり、本人の意見を述べて行く。最後にある結論が導けるように討論した。④peer で話し合っている途中で、各グループに先生が参加し、英文の書き方、表現の仕方、問題の理解、構成の仕方、問題の意味を分離、整理し、租借させて、答を統合する、などのアドバイスや質問を学生達は受けた。⑤先生が立ち去った後に、各自で discussion の自分なりの答えを作成した。⑥ブレイクアウト解除のあとに、クラスの皆の前で指定された人が自己の意見を述べた。もちろんここでも、先生からのアドバイスや注意を受けた。ここでは、毎回、約5人から7人が発表をした。学生はメモなどを使って発表をした。しかし、やはり、speaking のみの discussion は一瞬にして消えてしまい、先生の feedback も聞くだけなので、一瞬は理解したようでも、記憶に長く残らない為、後期から、新たにこの6つに加えて、extra の課題を出した。これらは宿題としてメールにて提出してもらった。その内訳は、a) 自己のラフな意見を英語、または日本語で書く。b) 他人の意見を英語で書く。c) 教室での話し合いを基礎として、自己の topic に対する意見を書く。加えて、これらの提出課題には、4つのクライテリアを設けた。それらは、①説得力のある解答である。②論理的である (木村: 2020a, 2020b)。③ひとつでも興味を持つ意見を入れる、④問題解決案を入れることである。このクライテリアは学生に事前に知らせ、これを指標に点数を付けることを学生には周知した。このリサーチの中心は後期であり、後期の始まりよりも、後期の終わりにはこの4つが伸びていることを期待した。この4つは前期に行った練習から、筆者が「Writing としても伸びると良い」と判断した項目である。今回のリサーチ question は、Q1. この writing assisted peer discussion により、better な項目が増えたか否かを見る。また、Q2. どの点が良かったか? の大きく言ってこの2つである。

【方法】参加者はA大学の1年生で、64名(N=64)、英語のレベルは lower intermediate、調査は、1回目2020年の10月2日にメールで送られてきた discussion 課題で、“Giving money to poor nation is stupid.” だった。それと比較して点数化したものは、後期の最後の15回目、2021年の1月22日の課題で、“University lessons should be conducted by face-to-face or lessons though online are good enough?” だった。1回目も、15回

## THE 14th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

目も discussion の形態で自己の意見を英作文にしたものを評価尺度 1 点から 5 点で採点した。ここでのクライテリアは 4 つで、Q1 後期の最初と比較して説得力が増したか否か？ Q2. discussion 原稿はより論理的になったか？ Q3 ひとつでも興味の持てる意見を入れられるようになったか？ Q4. 問題解決案を入れることができるようになったか？を採点した。また、下のようなアンケートにも YES/NO アンサーに答えてもらった。Q5. 自分の discussion 原稿は後期の始まりよりも上達したか？ Q6. 他人(peer)の意見は役にたったか？ Q7. (peer との)話し合いは役にたったか？ Q8. では、「この discussion をやって、あなたにとって良かった部分はなんですか？」という質問に対して自由記述とした。作文の上達に対しては、Wilcoxon の符号順位検定を使用した。アンケート調査に関しては YES/NO question のところは、二項検定で有意義になったかどうかを見た。Q8 は重要だと思われる点を質的に抽出した。

【結果】課題の writing 原稿の結果はこのような結果となった。Q1. 後期の最初と比較して原稿の説得力が増したか否か？に対しては有意義になった。(Z=-6.13、N=57、 $p=0.00003$ 、片側検定)。Q2. の discussion 原稿はより論理的になったか？も有意義になった。(Z=-6.12、N=55、 $p=0.00003$ 、片側検定)。Q3 のひとつでも興味の持てる意見を入れられるようになったか？、Q4. の問題解決案をいれることができるようになったか？の両方が有意差は出なかった。更に学生のアンケート調査では、二項検定を使用し、全てが「Yes」で有意義になった。Q5. 自分の discussion 原稿は後期の始まりよりも上達したか？(Z=-7.34、 $p=0.00003$ 、片側検定)。Q6. 他人(peer)の意見は役にたったか？(Z=-7.88、 $p=0.00003$ 、片側検定)。Q7. (peer との)話し合いは役にたったか(Z=-7.63、 $p=0.00003$ 、片側検定)。Q8. の「この discussion をやって、あなたにとって良かった部分はなんですか？」で学生に共通意見の数例は次である。1. 大学に入る前には体験したことがない社会問題を考えるようになった。2. 先生の指導が良く、先生自身の意見や経験談が聞けた。3. 英語の writing skill が増した。

【結論】Stanford University (2020)では、peer discussion の重要性は、クラスでの discussion は、学生が、お互いから学び、自分の言葉で自己の意見を奨励することができる活動で、一般的に様々なトピックをカバーすることもできる。このインターアクションは、学生のモチベーションの向上にも結び付く。そのため、教師は discussion の価値を生徒に伝える為に、時間を割くべきだと述べている。

### 【参考文献】

木村美由紀 (2020a) Multivariate Classification of Student's Writing Weak Points with Japanese Language-Oriented English Sentence Structure (JLOS) and 3 step Procedure Model for Self-Correction. 外国語教育メディア学会関東支部研究紀要 4 号.1-20.

木村美由紀 (2020 b) Effective teaching through the LINE video medical Interview technique and a self-check evaluation form Journal of Medical English Education Vol.19 NO.3.73-81.

Stanford University (2020) *What is Peer Learning and Why is it Important?* <https://tomprof.stanford.edu/posting/418>.

オンライン授業における場づくりとアプローチ  
—英語学習のためのマインドセットに焦点をあてて—  
**Creating an Environment and Approach for Online Lessons:  
Focusing on Mindset for English Studies**

関戸 冬彦 (白鷗大学)

はじめに

2020年度よりオンライン授業に取り組まれている先生方は大学の英語科目に限らず数多いらっしゃることは想像に難くない。そしてそれは2021年度においても一部継続中であることだろう。本発表ではそうした状況下において、英語科目、特に初年次クラス、においてオンライン授業を展開するにあたり、どのような点に着目して展開していくとよりよい英語学習としての場づくりが出来るのか、という問いについての考察と授業実践例を紹介するものである。また、本発表の目的はそれに加え、参加して下さる先生方、みなさまご自身が、あるいはみなさま同士が、授業を行う際に気をつけていることなどについての情報を共有する時間にもしたい。つまり、上記問いは話題提供的な側面も担っており、共にその問いについて考えを巡らし、そして学びのある時間とするのが本発表の主旨である。

よって発表者である関戸は話題提供としての発表を行うだけでなく、極力ファシリテーターとなって発表と共に時間の管理や学びのナビゲートを行う進行役としても振る舞い、ご参加くださるみなさま方にも一部分の時間においては発言者となっていただけよう心がける。以下、このアブストラクトでは当日着目したい内容を事前に簡潔に記しておく。なお、本発表におけるマインドセットはキャロル・S・ドゥエック (2016) 『マインドセット「やればできる！」の研究』に依拠している。

## 1 マインドセットとは何か

マインドセットとは、簡単に言うと自分の能力、資質への捉え方、あるいは思い込み、のようなものだ。ドゥエックによるとそれは2種類、Fixed Mindset (硬直マインドセット)、Growth Mindset (しなやかマインドセット) に分けられるという。後者は「人間の基本的資質は努力次第で伸ばすことができるという信念」(13)で、「うまくいかないときこそ、粘りづよい頑張りを見せる」(14)特徴がある。このGrowth Mindsetこそが「やればできる」という考えを生み出す。

## THE 14th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

### 2 マインドセットを用いた場づくり、そしてそのアプローチ

ではこのマインドセットをいかに英語の教室、あるいは授業、そして英語学習に活用するだろうか。その根幹である「やればできる」は初年次の学習者には特に重要である。なぜなら、おそらくほとんどの確率でオンラインを含めた大学での英語授業のやり方やその内容、あるいは教員に対して不安感を全く感じないということはないからである。つまり、この「やればできる」を教員側がメッセージとして学習者側に伝えることで安全、安心の場、それに準ずる空気感、が生まれ、学習者たちは失敗や間違いを恐れなくなる。実はこれは空間的場だけに限らず、学び全般に関しても同じことが言える。たとえば学習者たちは大学受験まで絶えず正解の名のもとに答えの正誤に怯えてきた。もちろん、正解出来るに越したことはないが、間違っただとしてもそれを学びに変えられるかどうかでその後は大いに異なってくる。つまり、「やればできる」のメッセージを前面に押し出すことは学習者を動機づけ、主体的な英語学習者へと変容していくチャンスを与える可能性を含んでいる。

### 3 マインドセットを意識した授業実践例

上記が本当に功を奏するのかを示すべく、実際にマインドセットを前面に出したオンライン授業とその展開、効果や反応について具体的事例を示しながら紹介する。

#### まとめとお願いなど

本発表は、上記のようにマインドセットを中心に、オンライン授業にまつわる諸相についての発表をした後、短いながらも参加者同士が共に学ぶという建設的な場にする予定である。よって「はじめに」で述べたように発表者である関戸だけが話して質問に答えるというのではなく、参加して下さるみなさま、先生方と共に作り上げる学びの時間としたい。よって積極的なご参加が期待できれば幸いである。とはいえ、様々なバックグラウンド、ご経験により時に意見が異なることもあるかもしれないが、そうした場合でも相手の話を否定することなくお互いの意見を傾聴して下さることだけは（クラスルールならぬオンラインルールとして）お守りいただければと思う。こうしたことも **Growth Mindset** の一環でもあり、その結果それぞれが何か新たな視点、視座を得てくだされば本発表は成功したと言えるだろう。

#### 参考文献

キャロル・S・ドゥエック. “マインドセット「やればできる！」の研究”. 今西康子訳. 草思社, 2016年.

## 変形学習と大学 EFL オンライン教室

### **Transformative Learning Theory in the University EFL Online Classroom**

榎本アンドリュー (文教大学)

Andrew Enomoto (Bunkyo University)

With the advent of the CoVid-19 pandemic in 2020, classes around the world changed to an exclusively online format. With this change has come a myriad of challenges such as burnout, Zoom-fatigue, higher dropout rates and decreased student motivation. However, one of the most common complaints from students is the lack of meaningful learning that takes place in the university online classroom. Some educators have taken this opportunity to reevaluate their teaching methods and adapt to the online environment, however many educators continue to struggle with offering meaningful content. This literature review will discuss some of the ways in which Mezirow's transformative learning theory can be applied to result in more positive online learning outcomes in the university EFL online classroom context. Specifically, this literature review will discuss how certain aspects of Mezirow's transformative learning theory's 10 phases may be applied to the university EFL online classroom environment. The author concludes that critical reflection, rational dialogue through autonomy, and responsive action are three of the concepts that may help to produce more positive online learning outcomes.

## 大学1年生の英語学習意欲の大学間比較

### **Comparison of First-year Students' L2 Motivation at Four Universities**

Tetsuya Fukuda (International Christian University)

This paper discusses the comparison of first-year university students' L2 motivation levels at four universities in Kanto, Japan. L2 motivation is generally recognized as a very important factor to affect language learning, and each school has its own culture distinguishable from other schools including the general atmosphere to study English. Also, the first year at university is known as the transition time when students sometimes change dramatically.

In this study, L2 motivation is conceptualized to comprise five sub-components: effort, enjoyment, integrativeness, instrumentality, and ideal L2 self. Each sub-component was targeted with five to seven survey items, most of which were derived from previous studies. The survey was administered on 540 first-year students at four universities, Universities A, B, C, and D, in Kanto, Japan. University A is small but highly ranked, University B is large and highly ranked, University C is small and less prestigious, and University D is middle-sized and less famous. The data were collected at three times in the academic year 2018: in June referred to as Time 1, in October referred to as Time 2, and in January referred to as Time 3. The survey as a whole and the sub-components were examined statistically with internal consistency, exploratory factor analysis, and the Rasch analysis. With a small modification, the validity was secured. The data were examined for normal distribution and as a result, the normal distribution was attained, and the number of participants decreased to 499.

The below table shows the means of the person measures obtained by Rasch analysis of L2 motivation. Consistent with previous studies which showed the tendency of losing motivation over the year, the participants in this study generally showed gradual loss of motivation to study English. However, the four universities showed different patterns of changes. University A and University D showed the gradual changes from Time 1, Time 2, and Time 3. University C showed a significantly larger loss than other universities. In contrast, the students in University B, who were least motivation to study English at Time

THE 14th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

1, remained almost at the same level of L2 motivation throughout the year. The change was also examined with a growth curve model, one type in structured equation modeling. The model with school as a predictor was compared with a model without a predictor, and it was found that both models show a good fit of statistics, which indicates that students generally change their L2 motivation levels over time and that their initial level and the way they change may be predicted by which school they attend. Pedagogically, the results imply that the administrators of language programs and the instructors there alike can keep in mind that their school has its own characteristics which can be called a school culture, and that their students change during their first year in a different way than in other schools.

*Means and Standard Deviations of the Person Measures of L2 Motivation at Three Times (N = 499)*

Time	Total		University A		University B		University C		University D	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
1 Spring	1.19	1.10	1.35	1.04	.83	1.10	1.28	1.19	1.93	.91
2 Fall	1.06	1.13	1.19	1.09	.86	1.15	.48	1.06	1.69	.99
3 Winter	.94	.56	1.00	1.11	.87	1.26	.20	.80	1.21	.55

**Foreign Language or Lingua Franca: Examination of the  
Application of Research Outcomes to Language Education  
Through Pragmatics**

**Moderator (and Presenter):**

Lala Takeda (Showa Women's University)

**Presenters:**

Megumi Okugiri (University of the Sacred Heart)

Naoko Osuka (Meiji University)

Pino Cutrone (Nagasaki University)

Keisuke Imamura (Tokyo University of Marine Science and Technology)

Misa Fujio (Toyo University)

Ivan Brown (Joetsu University of Education)

Ayaka Takeuchi (Ibaraki Prefectural Shimodate First High School)

John Campbell-Larsen (Kyoto Women's University)

In 2019, we published the book *A Pragmatic Approach to English Language Teaching and Production*, which clarified the language production of Japanese learners of English and focused on the pragmatic differences in speaking and writing between their mother language (L1) and second language (L2). The contributors to the book empirically studied context-dependent communicative behaviors of English as a Foreign Language (EFL) learners in Japan, showing that by teaching pragmatics, English language instructors can make L2 learners aware of changes in attitudes toward communication. A comprehensive understanding of such phenomena enabled English language instructors to foster EFL learners' perception and appreciation of the differences in language and culture between L1 and L2 and help the latter effectively apply their newly acquired L2 knowledge in real-world communication.

Based on these considerations, this workshop provides brief explanations of the contributors and their later research in the following focus areas: the influence of learners' experience of studying abroad on their L2 pragmatic ability, genre-specific functions and communication strategies in L2 essay writing, the interactive aspect of written

## THE 14th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

communication and spoken peer-feedback sessions for English essays, and ways to enhance L2 learners' awareness of context dependency and creativity in multimodally co-constructing and negotiating meaning within an interaction. In addition, we open our discussion session to the audience by addressing the following questions:

1. At what point do we, as language teachers, want to apply research results to the pragmatic aspects of language education?
2. What are the aspects of language use that teachers can or cannot give instruction in (from the perspective of either a foreign language or a lingua franca)?
3. How should teachers utilize research based on classroom data for practice in every scene of ordinary life? How should they design classroom exercises to enhance their students' understanding of interactions with English language users outside the class?

To utilize the various academic experiences of the contributors—as teachers in high schools and colleges or learners of English and Japanese—we discuss the gap between research results and real-world language education. Further, in this workshop we examine how to enhance pragmatic production in L2 and teach pragmatics to L2 learners of English or Japanese by considering momentary interactions in a global society. Finally, we suggest that learning and teaching L2 pragmatics is important because it promotes the use of English as a lingua franca in East Asian countries (Lee [Ed.], 2021) and English as an international language worldwide (Tajeddin & Alemi [Eds.], 2021).

### References

- Lee, C. (Ed.). (2021). *Second language pragmatics and English language education in East Asia*. London, UK: Routledge.
- Tajeddin, Z. & Alemi, M. (Eds.). (2021). *Pragmatics pedagogy in English as an international language*. London, UK: Routledge.
- Takeda, L. & Okugiri, E. (Eds.). (2019). *A pragmatic approach to English language teaching and production*. Tokyo: Kazama Shobo.

小学校英語指導者の育成に  
**J-POSTL エレメンタリーはどのような効果をもたらすのか**  
**What effect does the J-POSTL Elementary have**  
**on pre-service primary school teacher development?**

米田 佐紀子 (玉川大学)、栗原 文子 (中央大学)

山口 高領 (秀明大学)、長田 恵理 (國學院大學)

Sakiko Yoneda (Tamagawa University), Fumiko Kurihara (Chuo University),

Takane Yamaguchi (Shumei University), Eri Osada (Kokugakuin University)

司会：山口高領 提案者：米田佐紀子、栗原文子、山口高領、長田恵理

2020年度全面実施の小学校学習指導要領とCEFRに沿った、「小学校英語指導者のポートフォリオ」(略称 J-POSTL エレメンタリー)が2021年3月に完成した(JACETのSIG教育問題研究会)。同時に、このポートフォリオを紹介する動画ビデオも作成された。

本ビデオはポートフォリオの理念・背景・特徴・使い方を15分程度で紹介し、小学校教職課程における小学校英語指導者の育成に活用することができる。しかし、省察・自己評価記述文・協議を核とする J-POSTL エレメンタリーの価値は本当にあるか、あるとすればどのようなものか、どうやってそれを教職課程で取り込んでいけばいいのか、こうした疑問は尽きない。

そこで本シンポジウムでは上記のような疑問に答えるべく、紹介動画ビデオを用いながら、J-POSTL エレメンタリー理念・自己評価記述文の特定に至った過程などを説明し、実践事例をもとに、J-POSTL エレメンタリーが学生の成長をどのように促したのか、学生たちはどのように成長したのかを報告する。それに加えて、コロナ禍にあって、どのように省察や協議を促してきたのか、また今後どのような可能性があるのかについても触れる。成功事例だけではなく課題も共有し、議論する。

### 1. J-POSTL エレメンタリーとは何か

J-POSTL エレメンタリーは、167の自己評価記述文を含むポートフォリオである。教職課程の履修生は記述文を実践に取り入れたり、教員や他の学生と協議することにより理解を深め、課題を発見したり、自らの成長を可視化することができる。

### 2. J-POSTL エレメンタリーの理念

- ・小学校教育の理念と原則に配慮した外国語教育を志向している。

## THE 14th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

- ・外国語活動と外国語の双方を視野に入れて編集している。
- ・2020年度施行の小学校学習指導要領との整合性を考慮している。
- ・小学校の英語指導者に求められる資質・能力と授業力を明示している。
- ・授業力、基礎知識・技能のリフレクションを奨励している。
- ・同僚や指導者との話し合いを促進することを期待している。
- ・資質・能力と授業実践に対する自己評価力の向上を目指している。
- ・成長を記録する手段を提供している。

### 3. シンポジウムの流れ：動画による J-POSTL 理解と実践から見えた効果の紹介

まず完成した動画を用いて、J-POSTL エレメンタリーの概要を紹介する。そのうえで、Can-do 記述文選定の作業、決定のプロセスについて、全国の教職課程の協力を得て行った調査の概略と結果を報告する。

次に、J-POSTL エレメンタリーを用いた実践例とそこから見えた J-POSTL の効果について報告する。最初の報告は、学生の成長を、4年次の最後にまとめたレポートから浮き彫りにした実践について報告する。当該実践報告では学生自身が自分の未熟だった考え方に気づき自信をつけた例などを述べる予定である。

一方、多くの大学は1学期間あるいは1年間での活用になることも考えられる。次の報告では、短い期間でもどのように使い、何に気づかせることができるのかという実例を報告する。特にコアカリキュラムにより自由度の低いシラバスになる中で、個々の学生に向き合い成長を見守り、指導する教師も学生をとらえるツールになっている点は特筆すべきであろう。実際の授業での使用方法や学生の反応等についてパネリストがそれぞれ発表し、フロアと議論する。

なお、『小学校英語指導者のポートフォリオ』（J-POSTL エレメンタリー）』と紹介動画は JACET 教育問題研究会の以下のホームページで参照することができる。

<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/>

### 参考文献抜粋

Newby, D., Allan, R., Fenner, A-B., Jones, B., Komorowska, H., & Soghikyan, K. (eds.). (2007). *The European Portfolio for Student Teachers of Languages (EPOSTL)*. Strasbourg: Council of Europe Publishing.

Orlova, N. (2011). Challenges of integrating the EPOSTL into pre-service teacher training. In D. Newby, A-B. Fenner & B. Jones (Eds.), *Using the European Portfolio for Student Teachers of Languages* (pp. 19-28). Strasbourg: Council of Europe Publishing.